

お茶との出会い

滝高等学校一年（愛知県）

吉田 彩花

私と茶道との出会いは、小学四年生の時に家族で訪れた美術館敷地内の茶室だ。受付で「呈茶サービスを茶室にて行っております」との案内に「呈茶って何？」と母に尋ねた。「じゃあ、体験してみよう！」とのかけ声のもと家族で茶室へ。そこでは大人たちが神秘的な面持ちでふすまに背を向け一列になっていた。奇妙な光景に更なる不思議。そして着物を着た女性が茶碗の様な食器を運んでくる。私の頭の中は疑問だらけだったが、それを口に出せる雰囲気はなく、ただ促されるままに大人に混じって正座をし、頭を下げ、お菓子を食べ、お茶をのみ、茶室を出た。日常ではない空間から出て大きく息を吸った。

次の機会はわりとすぐに訪れた。旅行先の記念館のイベントでだ。今度は二回目だったので少し周りを見渡す余裕があった。一連の流れは前回とほぼ変わることがなかった。外に出て母に「なぜ皆が同じことを順番にしているの？」

あれは何かの儀式なの？」と聞くと母は「あれは作法に則っているのよ、習いたい？」と聞いてきたが、私は首を横に振った。なぜならそこに楽しさを見出せず、奇妙さと緊張感と足のしびれが強く残っていただけだったからだ。

私の母と祖母は生菓子が大好きだ。よって、おやつによく出てくる。プラスして抹茶アイステイもよく出てくる。私も大好きだ。食べる時ふと過去の呈茶サービスを思い出す。一体あの作法と呼ばれるいただき方には何の意味があるのだろうか。その疑問を解くチャンスが巡ってきた。高校の部活動である。中高一貫の為、中三以降は高校入学前に高校の部活へ参加出来る。友人に誘われた私は、作法を学ぶだけでなく、疑問解決に向けワクワクしていた。しかし、いざ始めてみると座って飲むだけに疲れた。

大人たちはすましていたが内心は違ったのだろうか。スムーズに人前で点てていた方たちは何と素晴らしいテクニクを持っていたのだろうか。どれだけの稽古をしたら軽やかにたおやかに出来るようになるのだろうか。簡単そうに見えた帛紗のさばき方も、茶筌の動かし方も正座も思った通りには全く出来なかった。お茶を点てる時は地味に全身がしびれて痛い。

痛いだけかと思われた部活も、お稽古を重ねる度に変化が感じられるようになった。まず、しびれが消えるのが早くなった。背筋も少しだけぴしっと伸ばしお茶を点てられ

るようになった。茶碗の中いっぱいにクリーミーに泡立つようになったと思っっている。

少しずつ手応えを感じるとやる気が出てくる。今では次の部活が待ち遠しい。残り二年半でどこまで覚えられるかわからないが、楽しみながら学びたい。

祖母と母からそれぞれ道具を譲り受けた。若い時に使っていたものらしいのでちよっぴり古いくさい。だけどうれしかった。